

## 学位請求論文審査報告書

氏 名 LAMAOZHUOMA (拉毛卓瑪)  
論文題目 ツォンカパの後期中観思想における二諦説の研究  
審査委員 主査 大谷大学教授 福 田 洋 一  
副査 大谷大学准教授 箕 浦 暁 雄  
博士 (文学) [大谷大学]  
広島大学教授 根 本 裕 史  
博士 (文学) [広島大学]

### I. 論文内容の要旨

本論文は、チベット仏教最大の宗派ゲルク派の開祖ツォンカパ・ロサンタクパ (1357-1419) の後期中観思想における世俗諦と勝義諦の二諦説の設定の仕方を、関連する様々な概念と比較しながら特定していったものである。ツォンカパにとっては中観思想が、全仏教の根本的な立場をなしており、彼の中観関係文献は顕教の著作の中でも半分以上を占めている。そのうち主要な著作は初期の『菩提道次第大論』(1401年)の毘鉢舍那章、中期の『了義未了義の区別・善説心髓』(1406年)と同年に書かれた『中論註・正理大海』(1406年)、後期の『菩提道次第小論』(1413年)の毘鉢舍那章と亡くなる前年に書かれた『入中論註・密意解明』(1418年)である。本論文が扱う後期中観思想とは、このうち、中期の『中論註・正理大海』以降の三文献に見られる中観思想を指す。

ツォンカパ中観思想の二諦説には、前期と後期で構造上の変化が見られる(以下、福田洋一『ツォンカパ中観思想の研究』大東出版社2018年参照)。前期の二諦説は、「中観派の不共の勝法」という縁起と無自性の同一基体性、あるいは無矛盾性の思想へと還元される。後期の二諦説は、凡夫、聖者、仏陀という三種の認識主体の相違によって、その対象として設定され、他の様々な概念と関連する枠組みの中に位置付けられる。福田(2018)は、この後期の二諦説について概要を指摘するのみで、その詳細な解明は今後の研究に委ねられていた。著者は、この欠を補うことを目標として本論文を執筆した。

本論文は以下の四章および序論と結論からなる。なお附論として「ツォンカパの年代考」および翻訳研究として『中論註：正理大海』『菩提道次第小論』『入中論積：密意解明』の二諦説の箇所の子ベット語校訂テキストと訳註が附属する。

#### 第1章 ツォンカパの後期中観思想における「世俗諦」についての分析

## 第2章 ツォンカパの後期中観思想における「戲論」の位置付け

## 第3章 ツォンカパの中観思想における勝義諦と滅諦と涅槃について

## 第4章 ツォンカパの後期中観思想における「離戲論」と仏智について

序論においては、まずツォンカパの生涯と著作全体の中で、本論文が扱う時期と著作が位置付けられる。次に二諦説についての従来の研究が簡単にまとめられ、その問題点が指摘される。さらに後期の『正理大海』『菩提道次第小論』『密意解明』において、二諦説が記述されている箇所 of 科文が示される。最後に本論文の研究方法として、インドの典籍やツォンカパ以前・以後のチベット人の著作と比較するのではなく、ツォンカパ自身のテキストを精読し、その用例のみに基づいて考察を進めることの妥当性が論じられる。

第1章では、世俗諦についてのツォンカパの主張が取り上げられる。ツォンカパは、世俗諦について、その名称の語義解釈と、世俗諦自体が何であるかの定義とを区別して理解すべきことを強調している。名称としては、「世俗諦」は「世俗」と「諦」に分解され、それぞれの意味が解釈され、それと同時にその諦を否定する「唯世俗」という概念が新設される。しかし、二諦の定義においては、「唯世俗」の定義は述べられず、世俗諦と勝義諦とは、凡夫の知と聖者の三昧智のそれぞれによって認識される対象であり、全ての存在がその二つのあり方を有していると説かれる。このように名称の問題と定義の問題を峻別するのは、従来のチベット人の誤った中観理解を正すためであることが示唆されるが、その具体的な研究は今後の課題とされる。

第2章では、世俗諦あるいは言説有と関連して「戲論(けろん)」の概念が検討される。この語は従来、言語的多様性を意味する様々な現代語に訳されてきた。しかし、中観思想にとって重要なこの概念について文献に厳密に基づいた研究はほとんど行われてこなかった。著者はツォンカパの後期中観文献の諸用例を検討し、①真実であると思込まれているが、実際には存在しない虚偽なるもの、あるいはそれを真実と執着する無明と、②存在するものとしては否定されないが真実には存在しない言説有あるいは諸法として現れているものという二つの意味で用いられることを示した。真実執着は凡夫の持つ無明を指し、修行によって退けられるべき否定対象である。一方、その無明を断じた聖者にも、無明の習気が残っているため、そこから幻のような諸法が現れる。それら諸法は幻の如くに真実なるものではないが、存在することは否定されない。ツォンカパの中観思想の体系の中では、従来研究者の主観的な印象で理解されてきたと思われる戲論が、用例毎に明確な位置付けを与えられ規定されることが示されている。

第3章と第4章では、勝義諦と関連の深い諸概念が比較考察される。まず第3章では、仏教における最終的な境地を指すと思われてきた滅諦および涅槃が、勝義諦とどのような関係にあるか

が考察される。最初にツォンカパが勝義諦をどのように規定しているかが検討され、勝義諦の概念の理解が提示される。次に初期仏教からの基本教説の一つ、四聖諦（苦諦、集諦、滅諦、道諦）のうち、滅諦のみが勝義諦であるという主張についてのツォンカパの解釈が検討される。滅諦は否定対象（＝集諦）を修行（＝道諦）によって退けることによって実現されるが、このときの否定対象である無明は「存在するもの」である。これを滅することで実現される滅諦が勝義諦であるとするれば、その勝義諦は存在する否定対象を否定することによって得られるものである。一方、無明によって虚構された自性を否定することによって得られる無自性も勝義諦と言われるが、このときの否定対象は存在しない虚偽なるものである。このように滅諦にも勝義諦にも否定対象が、存在するものである場合と存在しないものである場合とがあり、そして存在するもの（すなわち無明とその習気）の否定こそが仏教徒の目指すべき最終的な境地である。

仏教徒の目指す境地である「涅槃」についても、また諸法を真実に存在すると捉える真実執着（無明）が断じられたときに得られる空性を指す自性清浄涅槃と、その後も残っている無明の習気も断じられ、一切の現れが消滅した最終的な涅槃（客塵清浄涅槃）という二つの場合があること、そしてこのいずれも勝義諦であることが明らかにされる。

第4章では、第2章で検討された「戲論」を離れた境地である「離戲論」の二重性と仏智の関係について論じられる。離戲論は、戲論寂滅とも言われ、勝義諦と同列に置かれる概念である。戲論に真実執着あるいは真実成立の戲論と、言説有あるいは諸法の現れとしての戲論があったのに対応して、離戲論も存在しない自性を否定した無自性としての離戲論と、一切の現れが消滅した最終的な離戲論とがある。特にツォンカパの文献での用例としては後者を指すことが多く、これが最終的な涅槃を指すことになるのは、第3章で検討された通りである。

本論文で検討された概念は多岐に及ぶが、全てツォンカパの二諦説と関連のある根本的な構造の中に位置付けられることが本論文によって示されている。

## II. 論文審査結果の要旨

ツォンカパの中観思想は、上記福田（2018）の研究において、その存在論的な構造とツォンカパ自身の思想的展開過程とが詳細に検討された。本論文は、その成果を踏まえ、さらにそこでの考察が不十分であった後期中観思想の二諦説について、ツォンカパ自身の文献に密着し、深く切り込んで論じた本格的な研究論文である。とりわけ、無自性や空性、勝義諦、涅槃など、最高の価値を表現する同義語と思われていた概念に、二段階の意味があるとの指摘は、福田（2018）の研究成果を一步越えるものとして極めて大きな意味がある。様々な概念を、対象とする文献における、

ほぼ全ての用例を検討して位置付けていったことも、研究方法としてさらに徹底したものである。ツォンカパの中観思想の研究として現在の学界の水準を超える画期的な成果であると言える。

試問において、まず、ツォンカパの独自性を明らかにするには、ツォンカパが依拠するチャンドラキールティやブッダパーリタなどの主張内容との相違を検討することが必要だったのではないかと疑義があった。この疑義に対して、著者は、ツォンカパの主張を、その素材となっているチャンドラキールティやブッダパーリタの主張と比較することの重要性は十分に認めているが、そのためには文献の中の個々の箇所と比較ではなく、まずはツォンカパ自身の主張を統一的に正確に理解した上で、そこで明らかになったツォンカパの思想がどの程度それ以前の論師の理解に基づいているのか、あるいは何を批判しているのかを明らかにする必要があるという、本論文の研究方法を説明した。

また、本論文で検討している伝統的な概念については、これまでも特にインド仏教研究において様々な研究が積み重ねられてきたが、著者はそれらに言及するときに、ともすると誤解を与えかねない簡単な表現で済ましてしまう場合があることが指摘された。たとえば、戯論について「これまで研究されてこなかった」という表現について、「この分野のこの思想の研究においては」というような丁寧な限定を付け加えるよう提案がなされた。

その他、世俗諦の定義や語義、戯論についての独特の見解、仏教用語の訳語の問題、勝義諦や法性、空性などに二つのレベルを区別すべきことなど、個々の論点、あるいは審査委員が重要と考えた点について、著者の意図の確認が行われ、全て審査委員の納得するような説明を受けることができた。

最後に主査から論文の書き方についての注意があった。明確に論旨が辿りづらい箇所があること、重要ではあっても、その箇所の議論には必要のない内容が付加されていること、最初の課題で示されていない内容が結論に含まれている箇所があることなど、今後の研究活動で注意しながら論文を書くべきであるとの指摘があった。

論文の書き方についての注意はあったものの、審査委員による試問においては、本論文が、研究テーマも研究内容も現在のこの分野での最高水準にあり、学界に大きな貢献をなすものとの評価が与えられた。

審査に必要とされる最終試験については、審査委員全員により 2018 年 7 月 27 日に試問を行った。その結果、審査委員一同一致して、LAMA OZHUOMA に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。